平成３０年度・令和元年・２年度

さいたま市教育委員会委嘱　研究指定：道徳教育等

自分のよさに気付き、最後まで
やり抜く力をもった強い子の育成
～真の学力をはぐくむ道徳教育の推進～

平成３０年度　研究の概要

さいたま市立田島小学校

Ⅰ　研究の概要

１　研究主題

自分のよさに気付き、最後までやり抜く力をもった強い子の育成

～真の学力をはぐくむ道徳教育の推進～

（１）研究主題設定の理由

① 本校の学校教育目標

「心豊かでがんばる子」
- 進んで学習する子（知）
- 思いやりのある子（徳・コミュニケーション）
- 健康で明るい子（体）

② 児童の実態

本校の児童は、明るく活発である。休み時間は外で元気に遊ぶ様子が見られる。地域の協力を得ながらあいさつ運動に取り組み、朝のあいさつから声を出すことを意識させるようにしてきた。あいさつを切り口に、「自ら進んでできる子を強い子、言われてする子をよい子、言われてもしない子を弱い子」として教職員、児童、そして保護者や地域の方と共通理解をもって教育活動を進めている。

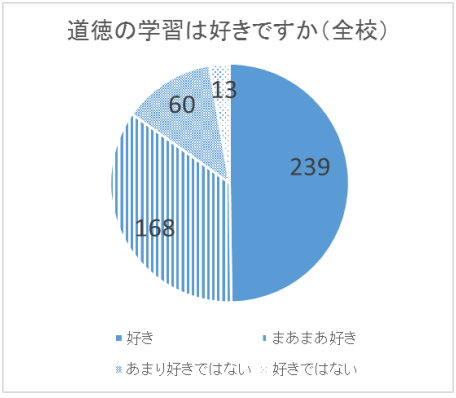
学校評価や市学習状況調査を分析すると、９割の児童は「学校が楽しい」と答えているところは、本校のよいところである。また、高学年の児童は「夢や目標をもっている」という回答が 72.2 パーセントであり、市の平均を上回っている。一方で、教育相談の内容や心と生活のアンケートから見る児童の実態では、自己肯定感が低い児童が多く見られる。さらに、教職員の児童の実態把握からは、「やり抜く力が身に付いている子が少ない」、「夢や目標に向かって努力を積み重ねることのよさが体得できていない」という意見が多く挙げられた。

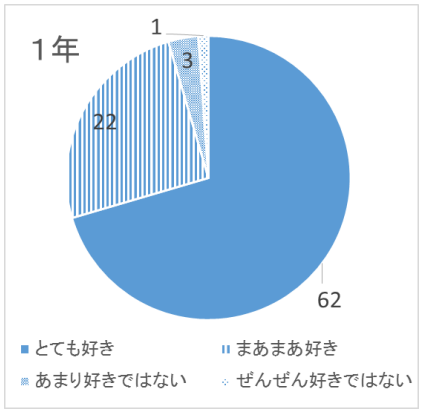
平成２８・２９年度の２年間は、主体的に学習を進める児童をはぐくむために、算数科を柱に研究を推進してきた。だれもが分かることを目指して、また児童どうしの学び合いが深まるように、手立てを工夫して指導方法を改善してきた。その成果を生かしながら、話合いを通して、自分のよさに気付けるような指導方法の工夫改善を図っていく。そして、自分のよさを認め、自分の力を信じることで、最後までやり抜く力をもった児童をはぐくむことを目指して研究を推進している。

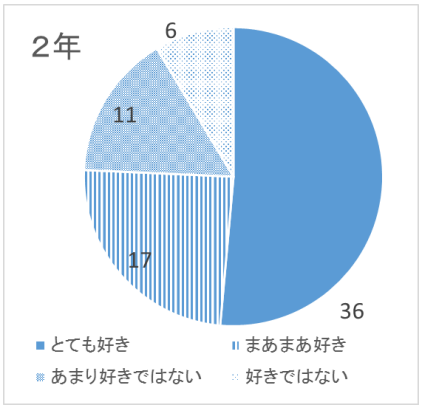
③　児童の意識調査より（平成３１年２月実施）

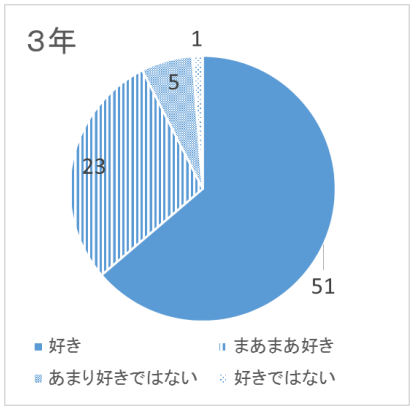
「道徳の学習は好きですか」についての結果

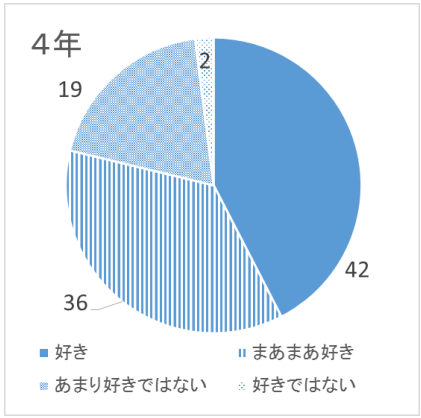
	好き	まあまあ好き	あまり好きではない	好きではない
1年	62	22	3	1
2年	36	17	11	6
3年	51	23	5	1
4年	42	36	19	2
5年	20	37	14	1
6年	28	33	8	2
全	239	168	60	13

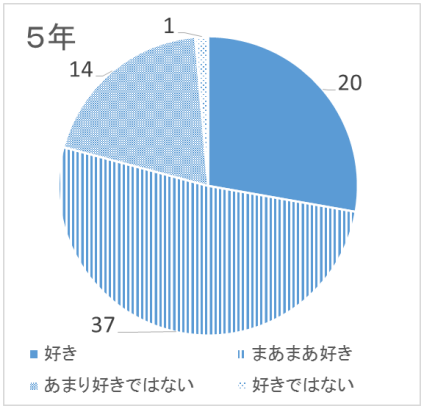


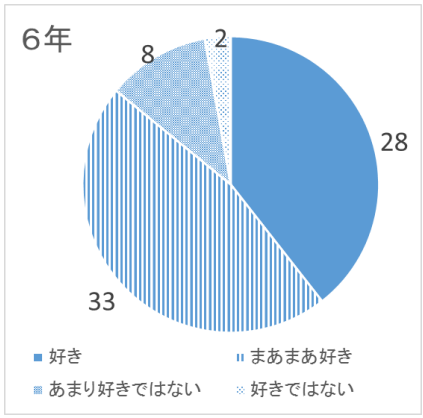








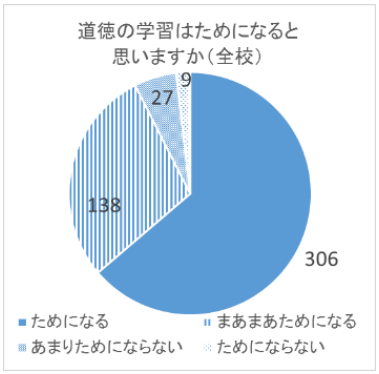




このように、全校児童の８４％が「好き」または「まあまあ好き」という意識をもっている。また、道徳の授業がためになるかを問う設問には、以下のような回答状況にある。

「道徳の学習はためになると思いますか」についての結果

	ためになる	まあまあためになる	あまりためにならない	ためにならない
1年	69	15	3	1
2年	41	22	4	3
3年	55	20	5	0
4年	58	30	9	2
5年	38	28	6	0
6年	45	23	0	3
全	306	138	27	9

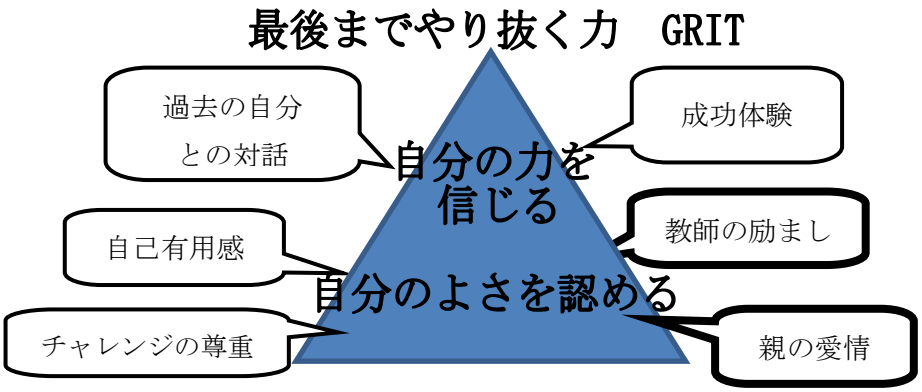


この結果から、児童のおよそ８割は道徳の学習に対して肯定的に捉えている状況にあると言える。学習内容が複雑になる高学年においても、肯定的に捉えられている。具体的に好きな理由を問うと、「友達の意見を聞いたり、自分の意見を発表できたりして楽しい」「新しいことに気付くことができる」「答えがないから、発表がしやすい」など、学び合いのよさを感じている反応が多くあった。他教科では、学習内容が難しいために、話合いを通した学習のよさが十分に感じられない児童もいるが、道徳科においては、そのように感じる児童が少ないと分かった。

以上のような児童の実態から、道徳科の授業改善に継続的に取り組むことで、学習が苦手な児童であっても主体的に考えたり、友達と認め合い、自分のよさに気付いたりすることができると考えられる。また、その過程で、教師の話を集中して聞き、自ら考え、自分なりの言葉で表現するといった望ましい学び方を学ぶこともできると考えた。このようにして、研究の視点と手立てを明確にしていった。

（２）目指す子どもの姿　…　最後までやり抜く力をもった強い子

本校の児童につけたい力を身に付けさせるためのプロセス図



※副題の「真の学力」とは、自ら進んで学ぼうとする姿勢や態度、また
自分の成長を信じて、努力を継続する力のことを指します。

２　研究の内容

（１）全体構想

学習指導要領
さいたま市
教育課程編成要領
さいたま市学校教育
推進の指針・
指導の努力点
さいたま市徳育プラン

〈学校教育目標〉
「心豊かでがんばる子」
・進んで学習する子（知）
・思いやりのある子（徳・コミュニケーション）
・健康で明るい子（体）

家庭の願い
地域の願い
教師の願い
児童の実態

確　か　な　学　力　の　向　上

研究主題：自分のよさに気付き、最後までやり抜く力をもった強い子の育成
～真の学力をはぐくむ道徳教育の推進～

研究の仮説…主体的に考え、話合いを通して、自分を振り返り、友だちや教師に自分のよさを認められれば、自分を信じて最後までやり抜く力をもった子どもが育まれるだろう

［視点１］…自分自身との関わりで考えるための授業改善

［視点２］…多面的・多角的に考えるための話合い

［視点３］…評価の工夫と活用

（２）研究組織と推進の仕方

校長→研究推進委員会→各専門部→低・中・高学年ブロック

（授業研究部／評価研究部／資料作成部）

（低学年ブロック（１年・２年・ひまわり学級・本部）／中学年ブロック（３年・４年・本部）／高学年ブロック（５年・６年・本部））

児童の実態把握・教材分析	→	指導案検討	→	授業研究会	→	研究協議	→	学習指導	→	実践報告
（学級・学年）		（ブロック）		（全体会）		（全体会）		（教職員）		（全体会）

Ⅲ　研究のまとめ

１　研究の成果

授業研究会の参観を通して、ねらいとする道徳的価値についての児童の実態を把握して指導を進めることが大切であると全教職員が理解することができた。各学級の児童の実態を教師が把握すること、教材分析をすることに努めて指導を重ねることで、自分の事として道徳的価値についてしっかりと考える児童の姿につながった。

また、本校児童の実態として、学年が上がるにつれて理解力や習熟の差によって活発な話合いが難しい教科がある。国語科や算数科ではその傾向が顕著に顕れる。しかし、道徳科では、話合いに対して、発言をしている意識をもっている児童が６７％、考えを比べながら聞いている意識のある児童は８９％ということが分かった。このように十分に肯定的な結果が出ていた。また、意識調査だけでなく、国語科や算数科の学習に対して前向きでない児童が道徳科の学習の時間に活躍する姿も各学級で見られた。以下に視点ごとの成果を挙げる。

［視点１］…自分自身との関わりで考えるための授業改善

○導入の工夫として、生活場面を想起させたり、事前のアンケート結果を様々な形式で提示したり、ねらいに関連する実物写真や日常生活の中で目にするメディア（新聞記事・ビデオ教材等）を見せたりした。そのことにより、自己を見つめる動機づけを図ることができ、自分に関わることとして、主体的に学ぼうとする意欲を高めることができた。

○表現活動の工夫として、動作化、役割演技などを取り入れた指導をすることで、問題となる場面の状況をよく理解して学習に取り組むことができた。また、道徳的価値のよさを体感できるように、話合い後に道徳的行為をする学習も取り入れられた。

［視点２］…多面的・多角的に考えるための話合い

○思考ツール（心情円盤や心の矢印、ネームプレートの操作）を活用して、自分の考えを表現させ、話合いを活発にすることができた。話合いを通して、自分の考えを友達や先生に認められたり、自分と違う立場や感じ方、考え方を理解したりして話合いのよさを感じ、学び合いの雰囲気が高まった。

○板書の工夫として、児童の反応を色分けして提示したり、明確な意図をもって対比的、構造的に示したりすることで、それぞれの意見がどのような考えをもとにしているのか知ろうと、互いに興味をもって話合いに参加していた。

［視点３］…評価の工夫と活用

○全校で「心の貯金箱」に取り組み、ワークシートを貯めていくことで、道徳的価値について一人ひとりの児童がどのように考えていたかふり返ることができた。また、教師や保護者により、認められたり、よさを価値づけられたりする機会が増えた。それにより、少しずつではあるが、自己肯定感を高めることができた。

２　今後の課題

◇各学年の実態に応じて、道徳科の学習指導の工夫改善を着実に図ることができた。「真の学力をはぐくむ」を実現するために、「自分のよさを認める」「自分の力を信じる」「最後までやり抜く」といった児童の姿が多く見られるように、教科指導だけでなく、教育活動全般において研究を推進していく必要がある。学校行事も含めて、意図的・計画的に指導が進められるようにしたい。また、家庭や地域との連携を図りながら、認め称賛し、時には厳しさをもって接しながら「最後までやり抜く力をもった強い子」を目指して、教職員一同で研究に取り組んでいきたい。